国際開発プランニングコンテスト 2013

活動報告書

Tokyo: 2013.3.11-14 国立オリンピック記念青少年総合センター

Osaka: 2013.3.14-16 大阪国際ユースホステル

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

✧ 代表挨拶

日本には「将来国際協力に仕事を通して携わりたい」という若者がたくさんいます。

しかし、その夢や目標を素直に追うことができる若者が今どれだけいるでしょうか。
学生の頃は、世界に目を向け様々な活動をしていたけれども、夢を追うことができずに納得のいかない人生を送ってしまう人が、少なくないのではないかなと思っています。
国際協力の道に進みたいと思う若者の夢を積んでしまう原因は、NPO の待遇の悪さ、社会全体の流れ、同じ志を持った仲間がいない、などたくさんあります。
ですから、これはある意味仕方のないことなのかもしれません。

しかし、それは未来の可能性をつぶしているのと同じことだとも思うのです。
私は国際協力を志す人ひとりひとりが、希望の星だと思っています。
世界を変えたいと願う若者の可能性をつぶしてしまうことは、世界を良くする可能性を一つつぶすことと一緒です。

IDPC は、2012 年に「国際開発プランニングコンテスト実行委員会」から「International Development for Progress and Change」へと団体名を変更しました。
また、関西支部も立ち上がり、新たに「国際開発を志す若者の為のプラットフォームとなる」という理念を掲げました。
ここには、ただ単にコンテストを開催しただけで終わるのではなく、IDPC を一つのコミュニティとして、国際協力に関わる人みんなで前に進んでいきたいという思いが込められています。

同じ志を持つ仲間と切磋琢磨し合い、自分の夢や目標を達成することによって、それぞれが一つの大きな光となって周りの人を照らし、そして世の中を照らす存在になって欲しい。
IDPC は国際協力を通して世界を変えたい、世界の役に立ちたいという人を本気で応援したいと思っています。
世界を良くする可能性をつぶしたくはないのです。

そしていつでもお互いの悩みや夢を語り合える、大切な場所として IDPC はいつまでも存在し続けたいと思っています。

最後に、今回 IDPC の立ち上げに当たって、私自身、本当に何度もくじけそうになりました。そんな中、真鍋さんを始め、支えてくださったOBOGの皆様には本当に感謝致します。
また、今回関東と関西でコンテストを同時開催するにあたり、本当に多くの現職者の方にお世話になりました。今回コンテストが無事成功したのも、皆様のご協力があったからに他なりません。本当にありがとうございました。
そして、一緒に団体、コンテストを創り上げてくれた関東、関西のスタッフ達。皆がいたから苦しい時も乗り越えてここまで来ることができました。本当に感謝しています。ありがとうございました。

「国際開発を志す若者の為のプラットフォームとなる」

この理念を全うするため、IDPC はこれからも全力で前に進んでいきます。
ですので、皆様、今後とも IDPC をよろしくお願い申し上げます。

IDPC 代表
津田塾大学　学芸学部　国際関係学科４年
平原歩美

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

✧ 目次

Ⅰ．開催概要

1．実施概要 ―― 1
2．企画趣旨 ―― 2

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

1．参加者の傾向 ―― 4
2．全体スケジュール ―― 5
3．プランニング ―― 6
4．プラン紹介 ―― 8
5．講演・講座 ―― 10
6．その他コンテンツ ―― 12
7．アンケート分析 ―― 15

Ⅲ． 活動報告

1．組織概要 ―― 17
2．活動詳細 ―― 18
3．決算報告：Tokyo ―― 19
4．協賛・協力 ―― 20

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅰ．　開催概要

1．　実施概要

国際開発プランニングコンテスト 2013 は下記の要領で開催した。

▼関東

期間　　2013 年 3 月 11 日(月)～14 日(木)　（３泊４日）
場所　　国立オリンピック記念青少年総合センター
参加人数　29 名

▼関西

期間　　2013 年 3 月 14 日(木)～16(土)　（２泊３日）
場所　　大阪国際ユースホステル
参加人数　14 名

対象　　国際開発に関心があり、将来当該分野で活躍する可能性のあるすべての人
参加費　　15000 円／人　（宿泊費・食事代込み）
主催　　International Development for Progress and Change

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

２． 企画趣旨

▼ コンテスト全体

-- 目的 --

将来国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献することで、途上国の発展に寄与する。

-- 対象者 --

国際開発に関心があり、将来当該分野で活躍する可能性のあるすべての人を対象者とした。今後の国際開発を担うであろう人に参加していただくため、自らの専門分野を国際開発に活かしたい大学生・大学院生だけでなく、自らの経験を活かして国際開発分野に携わりたい社会人の方々も対象に含めた。

-- 提供する３つの「場」 --

将来国際開発の分野で羽ばたく上で大きなステップアップとなるよう、コンテストを通して次の３つの「場」を提供した。

1 国際開発に必要な知識･スキルを身につける「場」

国際開発の分野でプロフェッショナルとして活躍するためには、語学力や専門知識はもちろんのこと、論理的思考力やコミュニケーション能力などの総合的能力も必要とされる。自身の能力を改めて確認し、磨きをかけることが、コンテストの大きな目的の１つだ。

2 同じ志を持つ仲間との出会いの「場」

コンテストでは、普段の生活では出会えないような熱い志を持った若者たちが全国から一同に集結する。同じ志を持つ仲間と出会うことでお互いに良い刺激を与え、これからのキャリアについて考える際や将来実際に仕事をする際に信頼し合える強い繋がりをつくることが出来る。

3 国際開発分野の機関・組織との交流の「場」

学生や他分野を職業にしている者にとって、国際開発の第一線で活躍する方々と出会える機会は多いとは言えない。現職者の方々に直接話を伺ったり自分の疑問をぶつけたりすることで、国際開発業界への新たな発見やより深い理解を得、当該業界を将来の現実的な選択肢として捉えることが出来る。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅰ．　開催概要

▼ ケース課題の意図

―「幸せ」という切り口から、今後の国際開発の在り方について考える

2011 年ブータン国王・王妃の来日を機に、“幸せの国”としてブータンが広く注目を集めた。ブータンの政治を大きく左右している「国民総幸福量」の考え方が私たち日本人には新鮮であり、理想郷として捉える声が多く挙がった。

そんな“幸せの国；ブータン”は、物質的にも豊かな国　とはとても言えないのが現実だ。今もなお各国からの支援を受け、インフラ整備や農地改革などの事業が数多く行われている。都心と地方との貧困格差が激しく、その影響は教育や医療など様々な分野に及んでいる。

幸せ＝物質的な豊かさ　とは限らない、私たちの当たり前を覆す感覚を深く知ることで、改めて国際開発の在り方を見直すきっかけとなることを期待した。

▼ 事前課題

コンテストへの準備と参加者のスキルアップを兼ね、応募時にエントリーシートの他、事前課題提出を要請した。

各々がボリビアの大統領に選出されたという設定で、国を治める長としてボリビアの開発戦略を考案し、大統領演説の原稿提出を課した。その内容を「インパクト」「実現可能性」「的確さ」「斬新さ」の４軸から評価した。また、演説が道筋立てて分かりやすく説明されているかどうか、人の心に訴えるものであるか、という「伝達力」を計るべく、大統領演説原稿を facebook ページ上に匿名にて公開し、いいね！獲得数を得点に加算した。

▼ 審査基準

審査基準は以下９項目を用いた。

①妥当性	④インパクト	⑦プレゼン資料
②有効性	⑤自立発展性	⑧プレゼン能力
③効率性	⑥整合性	⑨質疑応答での的確な回答

それぞれ４段階で審査していただき、中間発表・最終発表での得点とした。①～⑤は 1991 年に OECD 開発援助委員会が「DAC 評価方針」の中で援助評価手段として提唱した５項目を採用し、プラン内容に対する評価に用いた。⑦～⑨はプレゼンテーションに対する評価とし、30 秒超過するごとに１点を減点した。最終発表や今後に向けてプラン内容の強化すべき点や考慮すべき点を考えるため、審査結果は各チームへ返却した。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ．　当日報告：Tokyo

１．　参加者の傾向

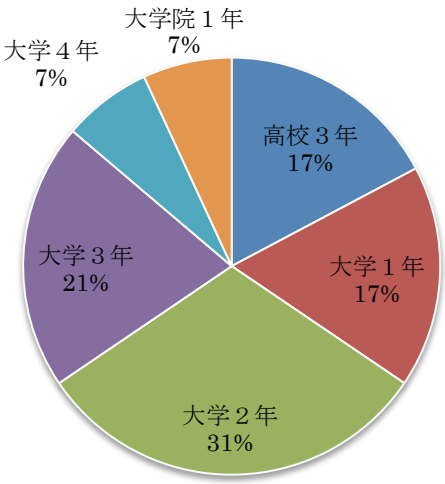
▼ 専門

大学・大学院での専門として、国際社会・国際開発・外国語文化など国際協力に関係のある勉強をしている参加者が非常に多かった。その他経済、法、流通、教養、環境、機械などバックグラウンドは実に様々であった。また専門に加え、英語を得意とする参加者が多く見受けられた。

▼ 学年

今年度初めての高校生参加が５名おり、他は大学１年生から修士１年生までの大学生・大学院生で構成されている。大学２年生が比較的多く全体の約３割を占め、例年と同様の傾向である。

開催が３月中旬だったため就職活動と同時期ではあったが、大学３年生・大学院１年生が合わせて全体の約３割に上った。就職活動による一時退席を許可したため、一時退席を利用して就職活動とコンテストを両立する人もいた。



▼ 出身

今年度より大阪での同時開催が実現したため、東京での参加者は１名を除いて全員が関東出身者であった。

▼ 所属大学

青山学院大学、京都大学、國學院大學、埼玉大学、創価大学、筑波大学、津田塾大学、東京大学、東京海洋大学、東京工業大学、法政大学、明治学院大学、立教大学、ルンド大学、ワシントン大学、早稲田大学（五十音順）

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

２． 全体スケジュール

Day1

初日は、これから濃い４日間を共に過ごす３０名の参加者が初めて顔を合わせた。チームが組まれ、アイスブレイクで打ち解ける。目標設定で今後４日間の自分の目標を設定し、プランニングに移った。また、初日は基調講演で ODA の現状と課題を学び、キャリアフォーラムで国際開発の分野でのキャリアについて考えた。

Day2

２日目は、プランニングに本格的に取り組んだ。膨大な情報が記載されているケース課題をチームで読み進め、課題が何かを探った。２日目の後半になるとメンタータイムが設けられ、様々なアドバイスをいただいた。プランニングの合間には、コミュニケーション講座が行われ、国際的な現場で働く上で欠かせないコミュニケーションのスキルについて学んだ。

Day3

３日目は、ここまでのプランニングの成果を示す中間発表が行われた。現職者の方から厳しいフィードバックを受け、その後のプランニングには一層気合が入ったようだ。午後にはテーマ講演が行われ、ケース課題国であるブータンについての知見を広めた。講演が終わった後も、ゲストの方に積極的に質問に行きプランに生かす参加者の姿が多く見られた。

Day4

４日目は、「最終発表」が行われた。各チームがこれまでのプランニングの成果を審査員に向けて思う存分ぶつけた。「フィードバック」では、初日に設定した目標に関して、チームメイト同士で良い点悪い点を振り返った。審査後は、１位、２位、３位、そして個人 MVP が発表され、優勝チームと個人優勝者には景品が贈られた。これにてコンテストは幕を閉じた。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

3． プランニング

プランニング

プロジェクト立案の舞台はブータン王国。
参加者は、国際協力機構（JICA）の職員、時は2009 年という設定で事業を立案した。

ブータン王国が公表した第 9 次五ヵ年計画の事後評価および第 10 次五ヵ年計画に関する英文レポートを読み、それに沿ってブータンが今後行うべき事業をチームで考案。

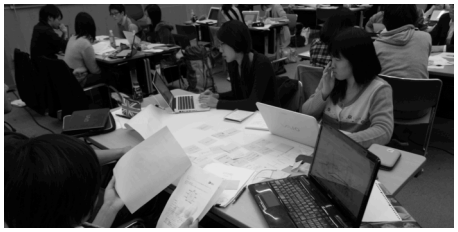
ブータンは国を挙げて国民総幸福量（GNH）を重要視しているため、いかにその思想を守りながらプロジェクトを立てられるかが今回のプランニングの一つのポイントであった。

GNH を重要視したプランニングをするにあたり、参加者は"開発をすることが必ずしも幸せに繋がるわけではない"という、開発をする者にとってはある種の葛藤ともいうべき感情を持ちながらプランニングを行った。

その為、プランニングをするのはいつも以上に難しかったと予想されるが、その思想をうまくプランに反映させことができたチームは最終的に審査員から高評価をいただいていた。

実際の現場でも、その土地の文化、思想、ニーズに合った事業を立案することが求められるため、参加者にとっては学びの多いプランニングになったに違いない。

情報が限られているブータンだが、英文レポートやコンテスト中に行ったブータンに関する講演を元に、ニーズを導き出し、夜中まで懸命にプランを考える参加者の姿が印象的だった。



メンタータイム

3 月 12 日(水)19:00～21:00 にメンタータイムを設けた。これは、参加者が考案したプランに対して、客観的な立場からアドバイスをもらう事が出来る時間である。

メンタータイムの目的は、プランニングや国際開発に関して知見を持った方から客観的な意見を頂くことで、最初の段階での論理的なつまずきを改善し、次の日に待ち構えている中間発表に備えることにある。各チームはこの時間までにプランの概要を定めることが求められ、主に、課題の特定とそれに対するアプローチの整合性が取れているか、主張する内容に論理的に矛盾する箇所はないか、ということをチェックしていただいていた。

参加者は、この２時間の間に計４人のメンター一人ひとりから意見を貰うことができたため、様々な視点からアドバイスを得ることができ、多少煮詰まっていたチームも、アドバイスを受けた後はより前向きにプランをブラッシュアップする様子が見られた。

メンター

上地　成就　様
東京工業大学大学院　総合理工学研究科
環境理工学創造専攻　修士２年

佐藤　淳　様
第２回国際開発プランニングコンテスト実行委員会
代表

國方　健太郎　様
東京大学大学院　工学系研究科　社会基盤学専攻
修士１年

金　辰泰　様
立命館大学　経営学部　国際経営学科　４年/
IDPC 関西　代表

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

中間発表

3 月 13 日の 13 時 15 分より、３名の審査員を招き中間発表を行った。各チームに与えられた時間は発表時間７分、質疑応答とフィードバック合わせて８分であった。中間発表では、ケース課題国であるブータンの持つ課題の中で自分たちが取り組むべき課題を特定し、プロジェクトの概要までを示すことを求めた。

中間発表は、審査員からフィードバックをもらい、次の日の最終発表に生かすということを主に目的とした。審査員からは、主に論理性が破綻していることに対する厳しい指摘が目立った。厳しいフィードバックをもらった参加者は、落ち込みつつも、自分達のプランを練り直し、次の最終発表に向けて追い込みをかけていった。

また今回初めて中間発表での順位発表を行い、参加者の競争心を高めることを試みた。

審査員

長谷川　浩一　様
東京大学公共政策大学院教授

可部　州彦　様
明治学院大学教養教育センター教員（社会起業）兼
笹川平和財団の「難民受入政策の調査と提言」
事業メンバー

山崎　潤　様
独立行政法人国際協力機構（JICA）
南アジア部　南アジア第一課　主任調査役

最終発表

3 月 14 日の 13 時 30 分より、国際会議場で最終発表を行った。広い会場、４名の審査員、そしてすべてのチームに見られているという緊張感のある環境であった。各チームには発表時間８分、質疑応答７分が与えられ、さらに時間を超過すると減点されるという厳しいルールが課せられた。

最終発表では、各チームがそれぞれ真剣に考え抜いたプランを審査員にぶつけた。中間発表を終えて、そのままでさらに内容を深めることに努めたチーム、またプランの方向性を変えなければならなかったチームなど事情は様々であったが、最終発表に向けてきちんと準備をし、７分という短い時間の中でそれぞれが自信を持ってプレゼンテーションを行っていた。また、審査員からの鋭い質問にも臆することなく的確に答えるチームが多く、議論の成果を十分に発揮できていたように思えた。

審査員からは、「現場でも話題に上るようなアイデアもあり、大変興味深かった」「大学生らしいユニークなアイデアも聞けておもしろかった」などの意見を頂いた。

審査員

長谷川　浩一　様
東京大学公共政策大学院教授

可部　州彦　様
明治学院大学教養教育センター教員（社会起業）兼
笹川平和財団の「難民受入政策の調査と提言」
事業メンバー

山崎　潤　様
独立行政法人国際協力機構（JICA）
南アジア部　南アジア第一課　主任調査役

真鍋　希代嗣　様
国際開発プランニングコンテスト idpc 創始者
外資系コンサルティングファームにて日本企業の
アジアやアフリカなど新興国市場への進出支援に
従事（当時）

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

４． プラン紹介

第 1 位:G チーム（Triumph）----------

「地方所得 UP プロジェクト」

農村地域を対象としたマツタケプロジェクトにより、都市と地方の収入格差解消を目指す。高収入を求めて農村から都市へ若者が移動することにより、農村労働力は減少し、都市では公害や渋滞など都市問題が増加している。そこで農村地域においてマツタケ栽培技術を支援し、また Bhutan Agriculture(BA)設置により組織マネジメントを図ることで、農業収入の増加を期待する。キャッチフレーズ"幸せの国"をかけ、マツタケをハート型にするなどオリジナリティも見られた。

大村　麻優子　　栗原　瑞穂
佐藤　大恭　　西山　巡

第 2 位：B チーム（βカロテン）----------

「GNH に即した持続可能な観光業発展プロジェクト」

GNH 思想に基づいた持続可能な観光業の発展を図り、ブータンの経済発展を促進すると共に GNH を向上させる。環境保全や文化保全とバランスよく成長を遂げることが GNH での「幸福になる発展」であると捉え、見識ある質の高い旅行客を対象とする。JICA がブータンのホテル経営者やホテル専門学校教師に質の高い日本のサービスを学ぶ機会を提供し、見識ある高い旅行者を呼ぶための環境を整えることで、GNH を重視しつつ観光業を促進することを期待する。

朝日　れいな　　石田　啓
上坂　明日香　　則武　洋輝

第 3 位：F チーム（ブータン担当部署）----------

「マイクロ水力発電による農村部電力安定供給プロジェクト」

マイクロ水力発電を用いて農村部のインフラを整備し、GNH 向上を臨む。ダムを用いた水力発電はブータンの主要産業であるが、インドへの供給義務により自国農村部については十分供給出来ていない。そこで比較的コストがかからず制限も少ないマイクロ水力発電を導入することで、ブータンの豊富な水資源を利用し、一年間昼夜問わず安定した発電が可能となる。電気の普及により農村部での収入増加／生活の質向上／学習時間増加などを期待し、GNH 向上を目指す。

荒井　慧　　桑原　未来
芹澤　沙蘭　　山崎　将一

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

Ａチーム（諦めないで！！）

「ブータン農村部における小規模水力発電普及モデル」

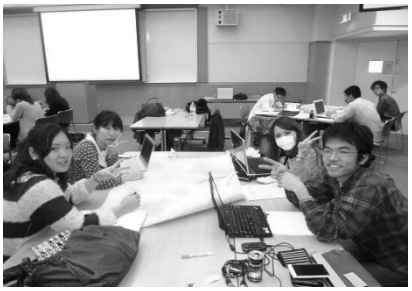
電力へのアクセス格差を是正するため、小規模電力発電を用いて山岳部の貧困層にも電気を届ける。ブータンでは大規模水力発電の電力輸送による外貨獲得を政府が重視しているため、国内の貧困層には電力が十分に届いていない。そこで政府経由無しに貧困層が直接電力を獲得できる仕組みをつくる。小規模水力発電は天候の影響を受けにくく、生態系への悪影響も抑えられ、さらに大規模な送電網が不要であることが利点として挙げられる。

片野　賢　　高橋　昌祐樹
野間　恒平　　前田　才華

Ｃチーム（じゃいたん）

「野生植物利用による産業活性化プロジェクト」

ブータン国内の野生植物の利用による産業活性化を目指し、都市部と農村部の格差を是正する。ブータンは高低差のある土地柄ゆえ多くの野生植物固有種が存在し、長年にわたって薬用に利用されているものもある。また高齢者層にそれらの関連知識が蓄積されている。野生植物を国内外で効果的に利用するため、継続的な野生植物の利用・伝統知の保全・環境保護をカバーした制度づくりを行う。これによって新たな品種育成および商品開発等への貢献を目指す。



坂口　秀美　　田岡　祐樹
出口　恵子　　中山　京香

Ｄチーム（ひよこクラブ）

「農業活性化による農村地域貧困削減」

農村経済の自立を目的とし、①農業の機械化②情報化③電源開発④職業訓練所設立を行う。農業の機械化により生産効率が向上し、また共同利用することによって農民間の連帯感を強化する。情報化により市場適正価格での取引や天候の把握が可能となるため、生産効率向上および収入増加が期待できる。現地慣習および文化を踏まえた上での技術運用や事業推進に注目し、コミュニティを利用することに重点を置いた。技術のコミュニティ運用により生産性が向上し、労働時間短縮や収入増加を通して個人の自由つまり GNH 向上を目指す。

今村　樹　　斉藤　和夏子
佐保　百合子　　新美　拓郎
孫　広治

Ｅチーム（つのだ☆○ロ）

「東部農村の貧困削減」

貧困者率の比較的高い東部農村を対象とし、農民の組織化および加工製品の製造販売を行う。個々で農業を営んでいる現状を組織化することで農作業の共同化を行い、また機械の共同利用によりコスト削減が可能となる。適切な役割分担による組織運営や計画を立てることで効率化を図り、収益拡大が期待できる。また加工食品工場を設けることで、収穫した農産物に付加価値が生まれる。JICA から技術提供、輸送や格納の支援、組織化支援、また設備投資を行う。

一戸　聡　　鳴海　ひかり
平岡　貫太　　和田　賢治

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

５． 講演・講座

基調講演

―「政府開発援助（ODA）の現状と課題」―

ODA の概要として仕組みや内容についてお話していただいた。近年のグローバル化進展や国際協力の多様化、日本経済の変化を考慮すると、ODA は日本のもっとも重要な外交手段である。近年では NGO や民間企業等との連携により幅広い国民の参加が実現し、より効果的な ODA の実施が進んでいる。今後は財政状況が厳しくなるため"広く薄く"の支援は困難になる。そこで"戦略性"および"効果"の２点に注目し、援助にアプローチしていく必要があるという。

-- 講演者紹介 --

大場　雄一　：　外務省国際協力局政策課 企画官

1970 年福島県いわき市生まれ、1993 年東京大学卒、1996 年ケンブリッジ大学大学院修士課程修了。建設省、外務省アフリカ第二課首席事務官、在オランダ大使館一等書記官、欧州局中・東欧課首席事務官、総合外交政策局人権人道課首席事務官（兼国際組織犯罪室、人権条約履行室、子の親権問題担当室）などを経て、2011 年 7 月、国際協力局政策課首席事務官。2012 年 7 月から国際協力局政策課企画官として、政府開発援助（ＯＤＡ）の予算・広報等を担当。

参加者の声

- ODA という言葉は知っていましたが漠然としたイメージしか持っていなかったので，大変わかりやすかった。
- もっともっと日本の国民に ODA の必要性を理解してもらうことが大切だと感じた。
- ODA には国益と世界益のどちらの側面もあることが興味深かった。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

テーマ講演 ―「ブータンから見る日本」―

ブータンが国家規模で重要視している GNH 思想を中心に、現地の様子や国民性など経験談を多く交えた講演をしてくださった。ブータンをはじめとする途上国と呼ばれる国々は決して遅れた社会ではなく、発展の方向性が違うだけである。故に途上国の発展から日本が学ぶことは多いという。また参加者からの数多くの質問にも対応していただき、様々な分野について多くの視点を与えてくださった。

-- 講演者紹介 --

平山　修一　：　ＧＮＨ研究所 代表幹事

国際開発コンサルタント（ガバナンス分野）、一級建築士。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻修士課程修了後、㈱シーエスジェイ調査企画部に主任研究員として勤務。現在、放送大学非常勤講師、大東文化大学兼任研究員ブータン、モンゴル、タイでの ODA 業務を通じて、途上国の経験や考え方を日本の地域作りに生かせないかとの問題意識を持ち、これの実践を目指している。著訳書に「現代ブータンを知るための 60 章」（明石書店）、「ダワの巡礼　～ブータンのある野良犬の物語～」（段々社）など多数。GNH 研究所代表幹事、日本 GNH 学会副会長などを務める。また 5 代目ブータン国王が結婚式を挙げられたプナカ城のクンレイ（金堂）の設計・施工監督者としても知られる。

参加者の声

・ブータン現地の様子や国民の声を知ることができ、よりリアルに感じ、理解することが出来た。
・「情報化や物流によりブータンは過渡期を迎えているが、昔ながらの慣習や GNH 思想などたくさんの魅力を後世にも伝えていくために、GNH の研究をしている」という平山さんの言葉が印象的。

講座 ―「コミュニケーション能力講座」―

将来的に国際開発を進路とするために必要な力の１つとして、コミュニケーション力について講義していただいた。コミュニケーション力といっても人それぞれで様々な種類があるため、それらの違いを各々に当てはめながら理解出来る時間となった。また将来の選択肢として、好きで楽しむために国際協力に携わり、そして経済的にも利を生んでいくという理想的な流れを提示した。

-- 講演者紹介 --

立山　桂司　：　国際開発コンサルティングファーム　適材適所 LLC 代表

（資格）プロジェクト・マネジメントスペシャリスト(PMS)、キャリアカウンセラー（CDA）

1986 年大学を卒業後、エンジニアリング系の開発コンサルティング企業(現 NTC インターナショナル)に就職し、国際協力のキャリアをスタートさせた。2002 年には、人間・社会開発系のコンサルティングファーム（ICNET）のジェネラルマネージャーとして、プロジェクトの形成・推進・運営とともに若手コンサルタントの採用と人材育成、若手人材ネットワークの拡大に貢献した。2006 年から 3 年間は立命館大学キャリアセンターで国際人材輩出のための専門職員として勤務し、就職対策アドバンスプログラムの企画・立案・実施・評価にも携わった。就活応援ブログ「就活テクニック ABC!～就活にテクニックはいらない」も公開している。2007 年には、国際開発と人材育成の理想実現のために自らコンサルティングファーム　適材適所 LLC を設立し、代表を務めている。

参加者の声

・コミュニケーション能力というものの定義が初めて理解できた。
・自分の興味のあるテーマだった。また、話し方がとても分かりやすくて参考になった。
・コミュニケーション力について、国際協力業界に絡めながらお話ししてくださったため、非常に興味深い内容でした。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

６． その他コンテンツ

開会式

オープニングムービーおよび代表挨拶から始まり、４日間の流れや各プログラム内容の説明を行った。

目標設定

各々がより充実した時間を過ごせるよう、IDPC を通して何を得たいのか、またこれから始まる４日間の目的や希望を改めて考える時間を設けた。

アイスブレイク

４日間共に切磋琢磨し合う仲間同士、自己紹介・思考回路の準備運動を兼ねて、名刺交換ゲーム・NASA ゲームを行った。これを機に会場の緊張感がほぐれ、和やかな雰囲気となった。

メンタータイム

翌日に迫る中間発表に向けて各チームの進み具合を確認し、より良いプランを策定するため、メンターからの助言をいただいた。参加者からは「客観的な視点からの意見でプランを批判してもらえたのがとても良かった」との声を頂いた。

結果発表

４名の審査員による評価を基に、上位３チームとを表彰した。また事前課題やチーム内評価等を加味した個人ポイント優秀者も発表した。みな温かい拍手でお互いの努力を称えあった。

フィードバック

審査員より、最終発表に対するフィードバックを各チームに直接お話ししていただいた。中間発表からどれだけ成長したのか、またどのような視点が不足していたか等、４日間の成果を確かめる時間となった。今年度よりフィードバックの時間を増やしたことで、より多くの学びを得られる場となった。

　またチーム内で各個人同士のフィードバックも行った。チーム内で自分が果たした役割や長所など、切磋琢磨し合った仲間同士ならではのコメントをやりとりすることが出来たようだ。

閉会式

審査員から参加者へ激励の言葉をいただき、代表挨拶および集合写真撮影にて第５回 国際開発プランニングコンテストは幕を閉じた。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

キャリアフォーラム ----------

国際開発に関わる様々な立場の方々と直接お話することで、当該業界の仕組みや仕事内容を理解し、各々の将来設計に役立てる場となった。ゲストの方々からの自己紹介後、20 分×４タームで各ブースに分かれた。参加者からは「知らない仕事内容を知ることが出来た」「直接会うことで、具体的な目標が見えた」「仕事を身近に考えられた」との声を頂いた。

-- ゲスト一覧 --

荒木　憲　：　アイ・シー・ネット株式会社　海外ビジネス支援室

1998 年に大学卒業後、電力会社、半導体メーカーでの経営企画、海外インフラ投資、調査業務などを経て、2009 年にアイ・シー・ネット株式会社に入社。現在、主に途上国での産業開発やエネルギー分野でのコンサルティング活動に従事している。中小企業診断士。

石川 輝　：　株式会社国際協力銀行（JBIC）経営企画部報道課 課長

早稲田大学政治経済学部経済学科卒、英国ウォーリック大学大学院修士課程修了（国際政治経済学）。1991 年、日本輸出入銀行（現 JBIC）入行。入行後は、調査部門や審査部門、ファイナンス部門（各種セクターにおけるコーポレートファイナンスやプロジェクトファイナンス、中堅・中小企業向け融資、出資、保証業務等に従事し、主に日本企業の海外事業展開支援を担当）、財務部門（国内外市場での債券発行やスワップ取引等）等を経て、現在は経営企画部にて対外広報やメディア対応業務等を担当。また、1996～99 年には、旧海外経済協力基金（OECF）に出向し、インド、ネパール向け円借款業務（電力、環境、保健セクター等）を担当。

井上　数馬　：　JICA　人間開発部 高等・技術教育課

大学（理工学部）卒業後、英国大学院にて修士課程修了（教育開発）。その後、青年海外協力隊として、西アフリカのニジェールの教育省統計局にて教育行政に携わる。帰国後、JICA に社会人採用として入構。JICA では、青年海外協力隊事務局アフリカ・中東課にて仏語圏アフリカのボランティア派遣事業に従事、その後、現在の人間開発部高等・技術教育課にてアジアを中心に途上国の大学
支援に携わる。

今西　靖治　：　外務省国際協力局政策課　首席事務官

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ．　当日報告：Tokyo

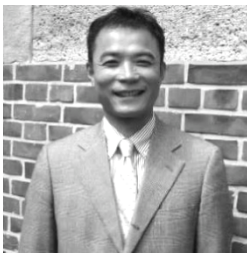
小濱　和彦　：　途上国貿易開発部　途上国貿易開発課　BOP 班

2002 年日本貿易振興会（当時）入会。海外事務所の予算・運営管理を行う部署で勤務した後、2004 年より広島貿易情報センターにて広島県内企業の輸出促進業務に従事。その後、2008 年から本部貿易開発部（現・途上国貿易開発部）にてアフリカ産品の対日輸出促進を担当。現在は途上国貿易開発部にて BOP ビジネスに取り組む日本企業に各種サポートを行っている。

田辺　直紀　：　途上国貿易開発部　アジア支援課

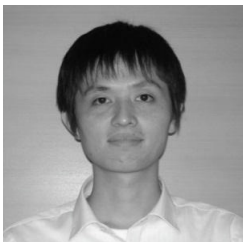
2010 年日本貿易振興機構入構、途上国と日本とのビジネス開発支援を担当する貿易開発部（現・途上国貿易開発部）に配属。予算管理・庶務業務を経て、2011 年 4 月よりアジア地域の事業担当。現在まで、ベトナムの裾野産業育成、タイの洪水復興支援、メコン地域の物流環境調査等の事業を担当している。

富野　岳士　：　国際協力 NGO センター（JANIC）　事務局次長



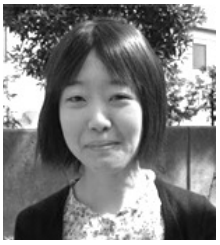
1989 年早稲田大学法学部卒業、2007 年早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学修士課程修了。大学卒業後、富士通株式会社に就職（1989 年～2005 年）。海外営業・インドネシア駐在（1995 年～2001 年）などを経て、2006 年より JANIC に勤務、2007 年より現職。NGO の理解促進・支援者拡大、他セクターとの連携、ファンドレイジング、NGO の人材育成・組織基盤強化を中心に活躍中。近年は NGO と企業の連携促進に注力し、「NGO と企業の連携推進ネットワーク」事務局を兼務。JICA、ジェトロ、経産省の BOP ビジネス支援スキームに委員として参画。

武藤　正樹　：　アイ・シー・ネット株式会社　経営管理部　人事・総務



2007 年 3 月に大学卒業後、精密機器メーカーで新卒採用・総務を担当した後、2011 年 10 月にアイ・シー・ネット株式会社へ入社。人事採用・総務・広報業務等に従事している

渡邊　友美　：　第３世界ショップ



2008 年津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業。在学中は学生 NPO 法人 AIESEC に所属し、主に南アジアや東南アジアの開発 NGO への学生インターンの斡旋を行う。また、大学 3 年時の独立行政法人 JICA でのインターンを通じて、農村開発や食の問題に関心を持ち始める。株式会社プレス・オールターナティブ/第３世界ショップにはインターンを経て 2009 年に入社。フェアトレード、オーガニック食品の製造管理、工場管理を担当する一方、商品開発などにも携わる。

参加者の声

・知らない仕事内容を知ることが出来た。

・直接会うことで、具体的な目標が見えた。

・今まで興味のなかった分野に対しても、興味を持てた。

・仕事を身近に考えられた。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

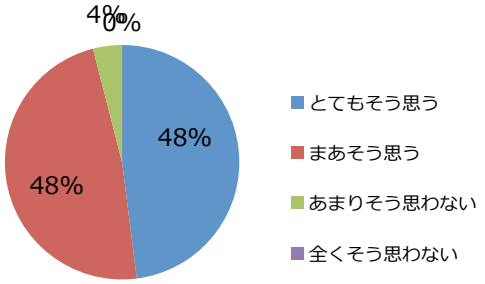
７． アンケート分析

idpc2013 の参加者に対し、今回のイベントに関するアンケート調査を行った。これにより、幣団体が掲げる問題意識を解決できたかを考察する。

１．全体について----------

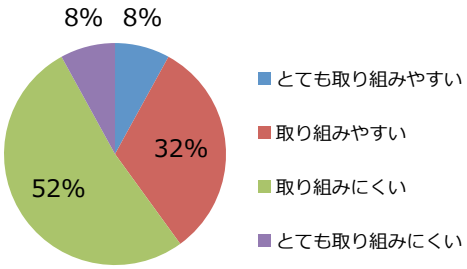
コンテスト全体に関して、「コンテストは全体を通してあなたの期待に応えるものだったか」いう質問に対し、96%の人が「とてもそう思う」もしくは「まあそう思う」と答えており、概ね参加者の期待には応えられたと言える。しかし、「もう少し専門家が集まるイメージだった」などの意見もあり、コンテストが、参加者が持っていた事前のイメージと乖離していたことも考えられ、今後更なるニーズの調査とそれに見合うコンテンツを考えていくべきとの課題も見えた。

▼コンテストは期待に応えられるものだったか



２.プランニングについて----------

▼ケース課題の取り組みやすさ



「ケース課題は取り組みやすいものだったか」という質問に対し、60%の参加者が「取り組みにくい」と答えていた。この原因は２つあると考えられ、１つめはケース課題の対象国がブータンでありやや特殊な国家であったこと、そして２つめは国家プロジェクトを考えるという、大きな規模の課題であったことが挙げられる。しかし、取り組みにくい、難しいとの意見はあったものの、「その分たくさん頭を働かせることが出来た」などの意見もあり、難しいからこそ参加者の成長を促すこともできたようだ。審査員に関してはほぼ全員が満足しており、「的確なアドバイスによって国際協力において大切なことを学べた」などの感想を残している。

３．サブコンテンツについて----------

サブコンテンツとして最も人気が高かったものは、キャリアフォーラムであった。参加者は、様々な職種の現職者と直接交流することで、仕事が身近に感じられ、知らない仕事に関しても興味を持てた模様。また他のコンテンツに関しても、「国際開発の意義をいろんな視点から見られた」（テーマ講演）、「客観的な視点からの意見でプランを批判してもらえたのがとても良かった」（メンター制度）などの意見があり、参加者の満足度を高められたのではないかと考える。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅱ． 当日報告：Tokyo

４．募集について----------

「事前課題は取り組みやすいものだったか」という質問に対し、一次募集に関しては、一次募集に応募した人のうち 60%の人が「とてもそう思う」、「まあそう思う」と答えた。一方で二次募集に関しては約 90%の人がそう答えた。これは、一次募集と二次募集で、課題の難易度の違いが大きくあったためと考えられる。参加者からも募集に関しては指摘があり、今後複数の募集を行う際には難易度を同じようにするなどの改善が必要であると考える。

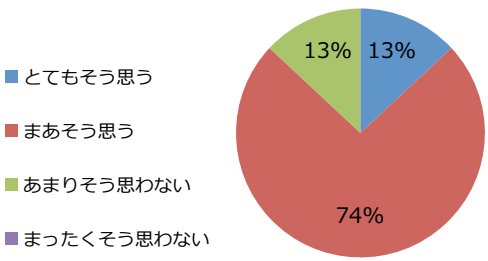
５．運営について----------

「コンテストの運営はスムーズであったか」という質問に対し、約 60%の参加者が「そう思わない」と答えた。理由としては機材トラブルや、進行の遅れ、連絡の遅さなどが指摘された。これに関しては事前に入念なリハーサルをしたり、スタッフ内でタスク管理をしっかり行うことで改善できると考えるため、次回以降、きちんと改善していきたい。

６．コンテストの目的について----------

今回のコンテストを通して、「国際開発の分野で必要な能力が身についたと感じるか」という質問に関しては、87%の参加者が「とてもそう思う」、「まあそう思う」と答えた。その理由としては、「プロジェクトを計画する上で考えなければならない要素を把握することができた」といった意見や、「論理的思考能力の重要性に気付けた」などといった意見があった。参加者同士の交流に関しては 60%の参加者が全体で十分交流できたと答えており、現職者との交流に関しては、92%の人が十分な交流ができたと答えている。以上から、当コンテストの目的である「国際開発で必要な能力の習得」「同じ志を持った仲間との交流」「現職者の方との交流」に関しては概ねそれを達成できたのではないかと考える。

▼当該分野で必要な能力が身についと感じるか



Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

Ⅲ． 運営報告

１． 組織概要

▼ 団体概要

今年度より、国際開発プランニングコンテスト以外にも様々な活動を行う団体として改めるため、以下のように Vision, Mission を改めて掲げた。また同時に団体名を idpc から IDPC（International Development for Progress and Change）とし、より幅広く活動すべく心機一転した。なお今年度より IDPC を関西でも立ち上げ、コンテストを同時開催した。

▼ Vision

「国際開発を志す若者の為の
プラットフォームとなる」

国内には世界に視野を向けた若者がたくさんおり、その多くが「途上国のために役に立ちたい」と強く願っている。しかし、今の日本には彼らの芽を摘んでしまうのに十分な理由が数多く存在する。それは例えば、「国際開発の現場で必要とされる能力を身につける機会が少ない」ということであったり、「国際開発の分野での業務が現実的な将来の選択肢として捉えられにくい」といったことが挙げられる。

このような環境の中で、国際開発を志す若者たちを支援し彼らの可能性を広げるべく、IDPC は当初国際開発プランニングコンテスト実行委員会として 2008 年に東京でスタートした。形を変えつつも IDPC は、初代の考え方を受け継ぎながら、合宿形式の国際開発プランニングコンテスト等といった様々なイベントを通して、国際開発を志す若者や現職者たちが集まり、既存の問題が多く残る国際社会を変える力を得ることができるプラットフォームになることを目指している。

▼ Mission

左記 Vision を実現すべく、以下の 3 つの場を提供することを目指す。

①国際開発で必要な能力を身につけられる『場』
②同じ熱い志を持った仲間と出会える『場』
③国際開発の第一線で活躍する現職者と交流できる『場』

活動を進める際は総務局／企画局／広報局／渉外局の４局に分かれ、業務を分担して進めている。スタッフは学部３年から修士１年まで在籍し、専攻分野は法学、経済学、理工学など国際開発分野のみならず多岐にわたる。

関東スタッフは週に１度のミーティングにて活動を進め、各局の進捗を共有している。また Skype を利用し、東西それぞれで話し合った内容を各代表および関係者で共有／議論している。

▼ 年間の活動

上記に掲げた理念を果たすべく、IDPC は国際開発プランニングコンテスト他下記イベントを開催した。

2012 年 4 月～	始動（関東）
2012 年 9 月	『おいしいコーヒーの真実』上映イベント開催（関東）
2012 年 9 月	IDPC 関西発足
2012 年 11 月	問題解決ワークショップ（関西）
2013 年 3 月	第 4 回国際開発プランニングコンテスト開催（関東・関西）

正式名称
International Development for Progress and Change
創立 2008 年 4 月 28 日
スタッフ数 11 名
代表者 平原 歩美（津田塾大学 4 年）
ホームページ http://idpc.weblike.jp/top/
問い合わせ先 idpc.jp@gmail.com

▼ スタッフ紹介

-- 関東 --

総代表	平原　歩美	企画局：	川口　一毅
副代表 兼 企画局：	河合　彩里伊	広報局：	佐藤　ひかり
総務局	星　菜摘	渉外局：	宿谷　綾子
総務局	保谷　朝美	渉外局：	青木　美佳

-- 関西 --

代表	金　辰泰
総務局：	森本　和明
渉外局：	城田　莉那
広報局：	村上　彩

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

２． 活動詳細

▼ 定期ミーティング----------

以下の内容でミーティングを行い、コンテスト等イベントの開催に向けて活動した。イベントについての他、「idpc」から「IDPC」としてより幅広い活動を始動するための Vision,Mission を練り直したり、関西発足への準備をしたりと、団体再編のためにも時間を費やした。

＜ 関東 ＞
日時：毎週木曜日 19：00～22：00
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

＜ 東西 ＞
Skype のオンラインサービスを利用し、東西でコンテストを同時開催できるよう代表および関係局でミーティングを行った。

▼ 模擬コンテスト----------

コンテストで用いるケース課題の見直しや運営リハーサルとして、スタッフ間での模擬コンテストを８月に行った。ケース課題にスタッフ自ら取り組むことで、問題点や準備の不足している点を洗い出し、コンテスト当日により良い課題を参加者に与えられるよう励んだ。

▼ 勉強会----------

ワークショップやコンテストを通して国際開発分野のイベントを開催するにあたって、スタッフ自身も当該分野の知識を身につけるため、ミーティング時に勉強会を行った。プレゼンターはスタッフがローテーションで担当し、保健、水資源、環境、ジェンダー、防災など国際協力に関わる様々な分野を順番に扱った。勉強会の後半ではプレゼンターにより与えられた議題について自由に討論する時間を設け、国際開発への視野を広げた。

▼ ブログ----------

私たち IDPC という団体はどのような学生が集まっており、どのような活動を行っているのか、広報活動するため、定期的にブログを更新した。団体創立当時から続くブログは代々多くの方が見てくださっているため、今年度も活発に動き続けていることを周知させるために良い場となった。スタッフ各々の自己紹介や国際協力への意見も記すことで、団体の透明度をより高め、愛着を持っていただけるよう心掛けた。

▼ ケース課題作成----------

今年度より関東および関西にてコンテストの同時開催を試みた。コンテストでのケース課題は、東西共に同一のものを用いることにした。東西場所は違えど、IDPC として１つの目的に向かって活動していることに加え、同じ課題に対して他チームの参加者がどのようなプランを策定したのか知ることが出来る他、さらに日本全国に同じ志を持つ学生がいることを感じることが出来るため、ケース課題も統一した。

▼ 広報活動----------

団体の周知や参加者募集などは、例年同様にホームページ，各種団体のメーリングリスト，Twitter，口コミに加え、今年度から facebook を積極的に利用し始めた。関心を持った人は気軽にシェアやいいね！を押せるため、周囲への拡散が比較的容易に出来たように感じる。実際にコンテスト参加者やスタッフ募集の際、Twitter を見て IDPC の存在を知った人は多かった。一方で SNS は限られたコミュニティ内のみでの広報活動となるため、やはりホームページなどオープンな場を第一に利用する必要があるとも感じた。

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

３． 決算報告：Tokyo

支出			
用途	諸経費　（円）	数	小計（円）
食費	1,140	29 名×3 日間	99,180
wifi 接続費	50,000		50,000
資料作成費	9,000		9,000
施設使用料	319,800		319,800
当日備品	15,000		15,000
支出計			**492,980**

収入			
収入元	（円）	数	小計（円）
参加費	15,000	29 名	435,000
前年度繰越金	80,000		80,000
収入計			**515,000**

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.

４．　協賛・協力

▼協賛
株式会社オーシャナイズ様
株式会社シンライン様
株式会社アドフロー様

▼協力
ブータン政府観光局様
GNH 委員会

▼Special Thanks
周東明美　様/　AHURA JAPAN リングホーファー　様

Copyright(c) IDPC All Rights Reserved.